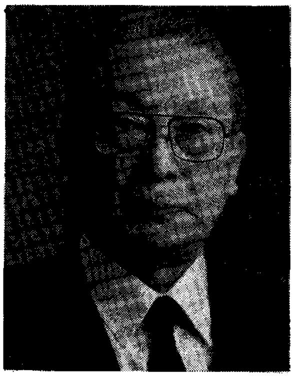
© 1988 ISIJ



新年のご挨拶—1988 年

久　松　敬　弘*

やや明るさの増した 1988 年新春を迎えることができて御同慶至極とおよろこび申し上げたい—というのが草稿の書き出しであつたが，10 月末における株価暴落，11 月初めの執筆時における，1 $=135 円の円高とドルの不安定化からみると，全会員に等しく明るいと言えるかどうかわからないところであるが，まずはおめでとうございます．

わが国製造業界は今，何はともあれ構造的変換を迫られている．製鉄業についていえば，これは本業におけるスリム化・コスト低減の血みどろの努力と，新事業開発による多角化との双方を意味する．Tonnage の多きを可とする分野については，開発途上国の追上げ，円高の進展等に対処して本格的スリム化を予定表どおり進行しなければならない．そして購買能力をもつ市場の奪取競争を行うものではなく，購買能力のない未飽和市場の開拓に向けて需要を拡げていかなくてはならない．EC では鉄鋼業の整備再建計画を樹立し，BSC もスリム化を行つてきた．その British Steel が半紙判ロンドン夕刊誌 Standard の 1987 年 11 月 4 日号に「British Steel は China の顔を変える」との見出しで 1 ページ広告を出している．中国人が安全剃刀でひげをそる写真の下に，吾人が中国人に剃刀替刃を供給している事実は余り知られていない．剃刀替刃の鋼では知れたものだと読者はいうだろうが，中国のひげそり人口を乗じてみれば，それは大きなマーケットであり，BS はその主要部を占めている，云々というものである．

さて一方，多角化の方向は，企業の浮沈のかかつたリスクを伴う試行錯誤であつて，後発の場合は殊にその苦しみが大きい．リスクの大きい仕事ほど自前の資金でやらねばならず，状況によつてはいつでも着手した新事業を断念する冷静な判断力と勇気をもたねばならず，たいへんむずかしい仕事である．

さて当協会事業の回顧や今後の予定は正式に，4 月の定例総会において報告されるから，2, 3 についてふれたい．本協会は昭和 61 年度に白松副会長を長とする臨時協会事業検討委員会を設置して鉄鋼業の構造転換に対応した本協会のあり方を検討した．その主旨は事業活動を刷新充実していくと共に支出を可及的に圧縮しようとするもので，同委員会の会長宛答申は「鉄と鋼」Vol. 73 No. 6 に全文を掲載された．理事会はこの答申を尊重する方向で，各種事業・委員会別に具体的に対処を検討し，実行を始めたものもある．事実上の正会員会費値上げに該当することであるので，昭和 62 年秋の臨時総会（10 月於熊本工業大学）において御承認をいただいたところであるが昭和 63 年から春秋講演大会概要集を，「鉄と鋼」から独立した「材料とプロセス(日本鉄鋼協会講演論文集)」として有償頒布することはまず全会員に目につく改革である．会員諸兄におかれては，会告等をよく目に留められ，当協会事業の変革の模様につき留意されると共に，その方向について意見を寄せて下さるよう願うものである．

本鉄鋼協会の大きな特色であり過去大きな成果を上げてきたものに各種の共同研究会があることは先

* 本会会長　東京大学名誉教授　日新製鋼(株)副社長　工博

刻御承知のところであろう．およそ学会が十二分ではないとしても有効な研究費を会員研究者に支出し得るということは，本邦の通常の学会のよく成し得ないところで，これは本協会が維持会員（会社）から大きい支持を得ているからである．先頃，Elsevier 社から刊行された“Blast Furnace Phenomena and Modeling”(鉄鋼基礎共同研究会高炉内反応部会編・委員長大森康男教授）は，いわゆる鉄鋼基礎共研（金属・鉄鋼・学振の合同）の部会活動の成果である．この基礎共同研究会については，新規発足の部会からは会合費のみの支出ということになる予定である．

以上の具体的な例はいずれも維持会員の会費負担のいささかの軽減を意図したものである．

さて，企業の多角化・貿易戦争回避のための国外進出は，とかく内弁慶であつた日本人に国際化をせまる．われわれのもつ文化（その土地の伝統に従つた固有のもの）はわけても特異なもののようであるから，違つた文化的伝統の中に育つた人々と接触して生活すると，異文化接触の問題がおこる．異文化接触状態にある移住者と土地の人とのコミュニケーションを滑らかにするためには，まずお互いの思いやりが必要で，これが国際化のはじまりであるようだ．

新しい事業を興して，しかもある人数の雇用を確保することはなかなかにむずかしい．ポアンカレのいうごとく，「異質のもとの組合せでしか，新しいものはできない」とすれば，わが国の（企業）研究所では外国人の研究者を雇用するメリットを考えてよい．新技術開発事業団の創造科学研究で若手外国人研究者を雇用して成功を収めているのは良い例である．

異種のものの参加の効用について比較的よく知られている話がある．鰯という魚の集団 (Sardines) を生きたままで移動させることはたいへんむずかしい由である．かの「鯰」(A catfish) と一緒に運べば，鰯を生かして運べるのだという．鯰が海水中で生きられることは，ひげ (Feelers) のある魚の地震予知能力についての研究をしておられる末広恭雄東大名誉教授の実験で1週間の河口での慣れがあれば可能とのことである．

前回は，純鉄の研究を進めて「鉄とその合金」の機能性材料特性を知ろうとする研究分野を提唱したが，国際化にともなう異文化接触の苦しみから，新しい「鉄とその合金」を生み出すことも，あるいは期待が持てるかも知れない．いずれにせよ，会員諸賢の御健闘を祈るものである．